

◎原 著

三朝分院外来における女性の腹圧性尿失禁の実態調査

奥田 博之, 高取 明正, 出石 通博¹⁾, 吉田 順子²⁾,
 山上 桂子²⁾, 坂田 旬子²⁾, 谷崎 勝朗³⁾

岡山大学医学部附属病院三朝分院産科婦人科

¹⁾岡山大学医学部附属病院三朝分院薬剤部

²⁾岡山大学医学部附属病院三朝分院看護部

³⁾岡山大学医学部附属病院三朝分院内科

要旨：三朝分院外来を訪れた女性患者を対象に尿失禁に関する18項目のアンケート調査を行った。その結果、全体の過半数が尿失禁の経験者であった。腹圧性尿失禁が大部分を占め、高齢になるほど、経産回数が多いほど頻度が高くなる傾向がみられた。そのうちの約1割に尿漏れの頻度と程度が重かった。以上より、尿失禁について積極的な啓蒙、診断、治療の必要性が認められた。

索引用語：腹圧性尿失禁

Key words : Urinary stress incontinence

従来、本邦では欧米に比べて腹圧性尿失禁を訴えて外来を訪れる女性患者が極めて少なく、医療側より半ば放置されていた。しかし近年ようやく数多くの女性が人知れず悩んでいるその実態が疫学調査で明らかにされてきた。^{1~3)} 妊娠、出産を扱う我々産婦人科はそういう女性と最も接する機会が多い第一線の医療機関として、腹圧性尿失禁の啓蒙・予防・診断・治療に対して大きな役割を担わなければならないと思われる。そこで今回まず我々は当病院を訪れる外来患者を対象にアンケート調査を行ったので報告する。

対象及び方法

1990年9月当病院の産婦人科、内科、外科を訪れた100名の女性患者を対象にアンケート用紙を配布し、計18項目について91名より回答を得た。

結 果

- 1) 全体の52.7%が尿失禁を経験していた。
- 2) 尿失禁の経験者は20代にみられず、30代の

41.1%、40代の65.5%、50代の50.0%、60代の69.2%に見られ、年齢が上がるにつれて頻度が高くなる傾向が見られた(表1)。

表1 年齢別尿失禁発現頻度

年 齢	尿失禁のある人数/調査数	
20~29 (歳)	0 / 4 (例)	0 (%)
30~39	7 / 17	41.2
40~49	19 / 29	65.5
50~59	12 / 24	50.0
60~69	9 / 13	69.2
70~79	1 / 3	7.7
80~89	0 / 1	0

3) 肥満度との関係を見ると、カウプ指数24以上の肥満者は尿失禁経験者の39.3%を占めたのに対して、尿失禁未経験者では31.9%であり明らかな差はみられなかった。カウプ指数18以下の若いそう者は尿失禁経験者には見られなかった。

- 4) 妊婦4名の内1名が尿失禁経験者であった。
- 5) 経産回数との関係では未産婦の14.2%、経産

回数1回の27.2%, 2回の58.5%, 3回の76.2%を占め, 経産回数が増すと共に尿失禁の頻度は増すように思われた。しかし経産回数4回以上の内では28.6%を占めるに過ぎなかった(表2)。

表2 経産回数別尿失禁発現頻度

経産回数	尿失禁のある人数/調査数	
0(回)	1/7	14.3(%)
1	3/11	27.2
2	24/41	58.5
3	16/21	76.2
4	2/7	28.6

帝王切開の既往者3名の内2名は尿失禁経験者であった。

産褥体操を行った症例は10例あったがそれにかかわらず9名が尿失禁経験者であった。

6) 尿失禁群で尿漏れの原因を調べると咳をしたとき(57.1%), くしゃみをしたとき(49.0%), 運動時(28.6%)と腹圧性尿失禁が大部分を占める一方で, 我慢し過ぎたとき(12.2%)と切迫性尿失禁が一部にみられた(表3)。

表3 尿失禁の契機(N=49 重複回答可)

契機	例数	
咳をしたとき	28(例)	57.1(%)
くしゃみをしたとき	24	49.0
何か運動をしたとき	14	28.6
笑った時	4	8.2
重いものを持ち上げたとき	4	8.2
我慢し過ぎたとき	6	12.2
精神的に動揺したとき	2	4.1

7) 尿失禁群で尿漏れの回数を調べると頻度的に少ない「1年間に何回か」が41.5%と最も多く, 逆に「1週間に何回か漏れるもの」及び「1カ月に何回か漏れるもの」といった比較的頻度の多い症例は各々14.6%であった(表4)。尿漏れの程度は程度の軽い「下着につく程度」が80.4%と大部分を占め, 程度の重い「ナプキンを当てるくらい」8.7%, 「スカートや床を濡らしたこともあり」が4.3%を占めた(表5)。尿漏れ対策は「下着を着替える」が45.7%, 「特に何もしないが」

39.1%, 「ナプキンを当てている」が10.9%, 「時間を決めてトイレへ行く」が2.1%であった(表6)。

表4 尿失禁の回数(N=41)

回数	例数	
毎日	0(例)	0(%)
1週間に何回か	6	14.6
1カ月に何回か	6	14.6
1年に何回か	17	41.5
数年に一度	12	29.3

表5 尿失禁の程度(N=46)

程度	例数	
気にならないくらい	3(例)	6.5(%)
下着に少しつく程度	37	80.4
ナプキンを当てるくらい	6	8.7
スカートや床を濡らしたこともあり	2	4.3

表6 尿失禁の対策(N=46)

対策	例数	
特に何もしていない	18(例)	39.1(%)
ナプキンを当てている	5	10.4
下着をきかえる	21	45.7
時間をきめてトイレに行く	1	2.1
その他	1	2.1

8) 尿失禁群のうち現在も尿が漏れると答えた人は37.0%であり, 自然寛解率は63.0%であった。またどの年代で尿漏れを経験したことがあるかの問いに対しては30代(28.9%)・40代(23.7%)・50代(18.4%)の順に尿漏れを経験が多かった。

9) 排尿回数を尿失禁群と失禁(一)群で比較すると, 1日10回以上排尿する人が尿失禁群の8.1%にみられたが失禁(一)群ではみられなかった。夜間排尿回数1回以上の人は尿失禁群の68.3%, 尿失禁(一)群の51.6%にみられた。

10) 尿に関する愁訴との関係では, 尿が近いと思ったことがある人は尿失禁群の40%, 尿失禁(一)群の35.7%にみられた。残尿感を訴えた人は尿失禁群の18.8%, 失禁(一)群の内の13.5%にみられた。尿に行きたくても少ししか排尿しなかった経験を有する人は尿失禁群の26.0%, 失禁(一)

群の9.0%にみられた。尿がでにくいと思ったことのある人は尿失禁群の8.3%、失禁（一）群の7.3%にみられた。水分摂取量との関係では、よく水分を摂取すると思っている人は尿失禁群の45.8%、失禁（一）群の38.1%にみられた。

11) 日常の運動では“殆どしない”または“散歩程度”の人が両群とも全体の9割近くをしめた。また立ち仕事や歩き回る仕事など比較的運動量の多い仕事についている人は尿失禁群で43.9%、失禁（一）群で46.2%にみられた。

12) 尿失禁経験者の62.5%に現在内服中の薬があり、降圧剤（8名）・喘息の薬（4名）・精神安定剤、女性ホルモン剤（各々3名）の順に多かった。また子宮筋腫の手術を受けた11名の内8名、72.2%が尿失禁の経験を有していた。

13) 尿症状を主訴として医療機関を受診した人は尿失禁群の内の45.8%にみられたのに対し、失禁（一）群の内の5.1%にみられたに過ぎなかった。またその際の受診医療機関は産婦人科・内科・泌尿器科ともほぼ同数であった。

考 察

女性の“quality of life”の向上の為には腹圧性尿失禁が避けては通れない疾患であることが今回の調査でも伺われた。尿失禁経験者の全体に占める割合は50%を越えそのほとんどが腹圧性尿失禁であった。婦人科外来のみについて調査した過去の成績23~34%⁴⁻⁶⁾に比べて多かったが、これは内科、外科を含めたために50歳以上の高齢者層が全体の45%を占めたためであろう。従って従来羞恥心や諦めから外来を受診しなかった女性や外来を受診しても自分からは尿失禁があることをいだしにくかった女性患者に対して、正しい啓蒙活動を行うことや丁寧な問診を行うことにより、治療に向かわせることができるのではないかとと思われる。

女性の腹圧性尿失禁の原因に加齢、妊娠、出産が関与していることは広く認められていることである。今回の調査でもそのことがほぼ裏付けられた。Francis⁷⁾の妊婦400名の追跡調査によると妊娠中の尿失禁は産褥期に消失する傾向がある

が、妊娠のたびに再発増悪し次第に出産後も継続するようになっていくと報告している。また出産後になって初めて失禁が発生することは稀で、殆どは妊娠中すでに後部尿道膀胱角の異常を伴って失禁を認めるという。妊娠後期の妊婦が尿失禁を破水と間違えて来院することはしばしば産婦人科医の経験することである。従来何気なく見過ごしてきたこういう患者を、骨盤底の筋群が弛緩し後部尿道膀胱角に異常をきたした、産褥期以降の尿失禁のハイリスク患者として捉え、積極的に産褥体操を指導しながら外来で経過観察し、必要な治療を行うことにより尿失禁の予防及び早期治療が可能だと思われる。しかし今回の調査では産褥体操の経験者のほとんどが尿失禁を経験しており、体操の方法と期間については見直すことが必要であると思われた。また子宮筋腫の術後患者の11名中8名が尿失禁経験者であった。腹式単純子宮全摘術の際、穹窿断端と骨盤腹膜を縫合しているが、その際後部尿道膀胱角に異常を来していることも考えられ今後尿失禁の予防に向けて調査・検討したいと思う。一方、肥満度、日常の運動量及び他の尿に関する愁訴の合併に関しては尿失禁群とそうでない群の間に明かな差はなかった。

この様に女性にとってかかわり合いの大変深い疾患ではあるが、今回の調査では腹圧性尿失禁の自然寛解率は63%もあり、尿失禁の程度・頻度共に比較的重症で治療を要すると思われた症例は尿失禁症例の約1割に過ぎなかった。また中に切迫性尿失禁を合併していると思われるものが存在した。従って腹圧性尿失禁の治療は患者を詳細に問診した上で諸種の検査を行い、基礎疾患の有無・尿失禁のタイプ・重症度を慎重に判定した上で行う必要があると考えられた。

女性の腹圧性尿失禁は妊娠・出産を契機に増悪と寛解を繰り返しながら更年期にほぼ病態が完成するという点で女性ライフサイクルと大きな関わりを持つ。そういう場面に立ち会う我々産婦人科医のこの疾病の啓蒙、予防、治療に対する責任は大きく、今後積極的に取り組んで行かなければならないと思われた。

文 献

1. 高井計弘, 宮下厚, 望月和子: 女性尿失禁の実態調査. 臨床泌尿器, 41: 393-396, 1987.
2. 福井準之介: 女性尿失禁の疫学的調査. 日泌尿会誌, 77: 707-710, 1986.
3. 加藤久美子, 近藤厚生, 岡村菊夫, 高羽秀典: 就労女性における尿失禁の実態調査. 日泌尿会誌, 77: 1501-1505, 1986.
4. Newmann, H. F. and Northup, J. D. : Female urinary stress incontinence. Amer. J. Surg., 102: 633-642, 1961.
5. Beck, R. P. and Hsu, N. : Pregnancy, childbirth, and menopause related to the development of stress incontinence. Amer. J. Obstet. Gynecol., 91: 820-823, 1965.
6. Losif, S.: Stress incontinence during pregnancy and puerperium. Int. J. Gynecol. Obst., 19: 13-20, 1981.
7. Francis, W. J. A.: The onset of stress incontinence. J. Obstet. Gynecol. (Brit. Emp). 67: 899-993, 1960.

Prevalence of urinary stress incontinence in women.

Hiroshi Okuda, Akimasa Takatori,
 Michihiro Izushi¹⁾, Junko Yoshida²⁾,
 Keiko Yamagami²⁾, Junko Sakata²⁾,
 Yoshiro Tanizaki³⁾

Division of Gynecology,

¹⁾Division of Pharmacy,

²⁾Division of Nursing,

³⁾Division of Medicine,

Misasa Hospital, Okayama University
 Medical School

The prevalence of urinary stress incontinence was investigated in 93 women consulting in our hospital by means of a questionnaire survey. The survey showed that 52.7% of the total cases experienced the loss of urine. 87% of the cases with the loss of urine were the cases with stress incontinence. The prevalence of incontinence increased with age up to 69.2% in the 60's. A positive correlation was found between the number of childbirths and the prevalence of incontinence.